

マラソン・セッションを振り返りながら

山家 歩

ニッポン・イデオロギーにとって特権的な場所である京都において、40年近くもの時を隔て、アルチュセールの「呼びかけ」に対する一つの応答として、『再生産について』をめぐるマラソン・セッションが行われたのは大変意義深いことであったと思われる。しかもこのセッションが行われた後、戦後レジームからの脱却を叫ぶ安倍政権が誕生した。その支持率は低落し、参院選での大敗により死に体であるとはいえ、教育基本法改悪、防衛庁の省への格上げが行われ、憲法の改悪も進められようとしている。また構造改革が促進する社会保障の削減と規制緩和によって社会は「不安社会」とでも呼ぶべきものとなっている。このような日本社会のさらなる状況悪化のなかでアルチュセールを読み返すこと、そして、アルチュセールをひとつの起点として批判的社会認識を研ぎ澄ませることの重要性はますます増しているといえよう。ここでは、セッションでの報告やその後の応答を踏まえ、現在アルチュセールを読む意義について、筆者なりに考えたことを幾つか述べることにしたい。

林淑美氏は、アルチュセールの国家イデオロギー装置論を戸坂潤のイデオロギー論と接合することによって、ニッポン・イデオロギーについて興味深い考察を行っている（『昭和イデオロギー』、平凡社、2005）。紙幅の問題からここではその内容について十分に述べることはできないのは残念だが、その重要な主張の一つに、「道徳的権威の承認としての『制度習得感』『安易快適感』に関するものがある。

『思想と風俗』におけるイデオロギー論は、社会的諸関係の再生産の形成についての明瞭な指摘であり、明らかにアルチュセールのイデオロギー概念に先駆けるものだが、それとともに、制度と個人をつなぐものとしての「風俗」の機能を述べて、道徳的権威の承認としての「制度習得感」また「安易快適感」という語を作り出した点に、イデオロギー理論のアポリアへの解決の方途が見えるのである。たとえば、この「感」が、アルチュセール—ジェイムソンによるイデオロギー概念〈現実関係に対する想像的な関係を示すもの〉、〈思い込みを可能にする表象構造〉に接続するからである。制度習得感の原質になるのが道徳であり、表象構造の形成にもっとも関与するのが道徳なのである。このいわゆる道徳が、制度習得感主体・自由な主体に対して働くというわけである。」（362 - 363頁）

この論点は一連のいわゆる構造改革の問題を考える上でも極めて重要なものである。たとえば、ホワイトカラー・エグゼンプションの導入をめぐる議論のなかで、厚生労働相の諮問機関である労働政策審議会の分科委員を務める奥谷禮子（人材派遣会社社長）は、「過労死は自己管理の問題」、「祝日も一切なくすべき」、「労働基準監督署も不要」といった発言を行い（「週間東洋経済」一月十三日号）問題となった。批判を受けて、奥谷は「倒産しても会社は社員を守っ

てくれない。早くから自律的な意識をもつべきで、労働者への激励のつもりで発言した」と抗弁をしている（「朝日新聞」二月八日朝刊）。

ここで興味深いのは、このときの厚生労働大臣の「女は産む機械」発言をめぐる騒動などがなければたいした批判も受けずにやり過ごされてしまったかもしれないこの発言が、労働者の自律を盾に経営の効率化を正当化している点である。自律、自己管理、自助努力といった通俗道徳的な言辭は、小泉元首相をはじめとして、構造改革の推進者たちがすこぶる好むところであり、この種の通俗道徳はマスコミなどを通じて現在うんざりするほど流通している（そして若者の道徳的墮落などが嘆かれ、愛国心と効率化に基づく教育改革の必要性が力説されることにもなっている）が、こうした通俗道徳の語彙は、言うまでもなく、社会構造的な問題を隠蔽し、諸個人の道徳的な問題に翻訳する役割を果たすものである。そして、人々は、イデオロギー諸装置を通じて、自立、自己管理、自助努力といった通俗道徳を受け入れることで、自らを自由な主体、自己についての責任主体と見なし、「安易快適感」のなかで進んで構造改革を支えることになる。

もっとも、奥谷発言は、言い過ぎ（あまりにも正直に？）だとして批判を受けたわけだが、それは常にイデオロギー諸装置の連動が首尾よく行き、呼びかけが常に成功しているわけではないことを示しているといえるだろう。人々はパブロフの犬のごとく呼びかけに反応させられているわけではなく、そこにはさまざまな対立や抵抗（意識的であれ、無意識的であれ）が存在する余地があるのだ。

加えて、この種のイデオロギーは、常にその通俗道徳性をむき出しにしているわけではない点にも注意する必要がある。すなわち、それはアルチュセールの言う「経済主義—技術主義的」な体裁を取ることが少なくない。通俗道徳的な言辭と一見価値中立的な「経済主義—技術主義的」イデオロギー、あるいは専門的知識と結びついたイデオロギーは単純に対立しているわけではなく、（時として矛盾や対立を含みながらも）相互強化の関係にあるといえる。情報装置が日々取り上げる様々な道徳的墮落（電車の中での携帯電話の使用、自転車放置、教員の痴漢、性的にふしだらな若者、行政の無駄遣いなどから政治家の汚職などに至るまで）について、常に何らかの専門家が通俗道徳を専門的語彙に翻訳する役割を果たしていることが示すように、道徳的権威の承認には、専門家の権威に裏打ちされた専門的知識と結びついたイデオロギーが深く関与しているのだ。

またここでは立ち入ることが出来ないが、「坂口安吾の『墮落論』は、墮落を方法とすることによる、モラルと呼ぶ新しい概念の創造のための書なのである」とする、「墮落論」に関する林氏の議論は、晩年のフーコーの自己のテクノロジー論について新たな光を投げかけてくれるように思われ、筆者には極めて興味深いものであることも述べておきたい。

一方、平井玄氏の報告の「アルチュセール素人の読み方」という題目は、専門家的な立場からアルチュセールを偶像化し、崇め奉ることへの批判的挑発を含むものなのかと思われ、とても好感を持ったのだが、真意を確認し損ねたのは残念だった。

平井氏の著書『ミッキーマウスのプロレタリア宣言』のなかに次のようなとても印象的な文章がある（大田出版、2005）。

「コミュニズム運動をヨーロッパを徘徊する「亡霊」に譬えたのは、誰でも知っているようにカール・マルクスである。ところが「社会主義」と呼ばれた運動は、それをスーツを着た人間たちの無表情な営みに変えてしまう。そしてその崩壊の果てに、その誰でも知っていたはずのことを二〇世紀の終わりに思い出させてくれたのは亡きジャック・デリダだった。彼はその言葉を手がかりにして、労働の存在論に引きずられたマルクスの思想を大きく読み変える端緒の一つを示したのだと思う。

そもそもプロレタリアは「亡霊」だったのではないだろうか。すでに良知力の全著作は、一八四八年革命の主体、つまり二〇代のマルクスが生きた時代の労働者たちが実は組織された工場労働の従事者などではなく、国内の流民、東方地域からの移民、貧民街の下民などからなる「歴史なき民」の混成体だったことを証すことに捧げられていた。そうした人々は一九世紀前半の西ヨーロッパ諸国民たちにとって「幽鬼」のように映っていたはずである。そしてその混合エネルギーと交渉し、すれ違い、あるいは衝突することによって練成されたマルクスの思想的可能性を非西欧地域にまで広げて、一九六〇年代から七〇年代にかけての歴史的条件下で再考＝再構成することに、良知の生涯の仕事は賭けられていたといえる。」(157-158頁)

この平井氏の言葉を受けて、次の問いかけを行いたい。アルチュセールの思想的可能性を非西欧地域まで広げて、現在の歴史条件下で再考＝再構成することはいかにして遂行されるのだろうか？

むろん、「これが答えだ」式の単純明快な解答があらかじめあるわけではない。この問いかけをめぐる考察は、資本主義的生産諸関係の再生産が続くかぎり、否、たとえそれが潰れても、アルチュセールの考えに従うならばイデオロギーから人々が最終的に解放されることはあり得ないのだから、絶えることなく、継続されていかなければならない任務であるといえるだろう。

ところで、こうした思考を推し進めてきたのが他ならぬ西川長夫氏であり、その国民国家論がアルチュセールの国家イデオロギー装置論を継承し、鍛え直していく上で極めて重要なものであることはいまさら述べるまでもないだろう。

西川氏は、アルチュセールが私的領域と公的領域の区別を国家装置の効果＝結果として捉えていることの含意を踏まえる重要性を繰り返し指摘している。この議論は、グローバリゼーションの趨勢のなかで進められている、一連の構造改革に基づく国家装置の再編を理解するうえでとても重要な論点である（この点については、同様の観点から、ただしフーコーの統治性研究に即して、ニコラス・ローズ達が展開している「遠隔統治」をめぐる議論も重要であろう）。

グローバリゼーションの趨勢については、アルチュセールの国家装置論から別の重要な論点を引き出すことも可能であると考えられる。それは、グローバルなものと同ローカルなものとの区別の問い直しに関わるものである。すなわち、国家装置という観点から見れば、グローバルなものと同ローカルなものはいずれも諸装置の連関として捉えることができるはずである。グローバルなものは、より多くの諸装置の連関から形成されるのであるが、それらはローカルな連関の集積に他ならないのだ。

以上まとまりのない文章となってしまったが、最後にマラソン・セッションの企画・運営に携わった人々への謝意と敬意を示してこの文章を終えることとしたい。

